

素材統制したコラージュ制作における表現特徴と性格特性との関連

Relation between Expression and Personality in the Material Control of Collage Works.

児童学研究科 児童学専攻 1000-090671 河内美保子

「問題と目的」

芸術という教育分野にも通じている中で、誰でも出来そうであり、なおかつ簡単に制作できるコラージュは自己表現手段として有効であると思われる。

杉浦(2007)によれば、カウンセリングの目的は、問題を抱えた人の素直な自己表現を促すことであり、自己表現を通してクライアントの自己治癒力を引き出すことにあると述べているが、子どもに対しては遊戯療法など言語表現が未熟、または苦手であっても遊びの中から何らかの自己表現を子どもからは見出すことができると思われる。遊びという現実から離れた世界で表現される言動はその子どもの深層心理であり、また自己表現と自己治癒力に通じるものがあると思われる。

大人の場合、杉浦(2007)によれば、言語が多すぎる人や少なすぎる人に、非言語での表現を用いることでカウンセリングをスムーズに促進し深めることが可能になると述べている。クライアントにとって得意な自己表現法があるだろうが、なかには自己表現の方法を見つけ出せない人もいであろう。その時にもともと用意された物が意味をなしてくると思われる。その代表例が箱庭であり、コラージュでもある。しかし、コラージュには技術的負担や抵抗が少ないといわれているのである。コラージュの解釈は、心理検査や性格検査などの心理テストを使用して行われている。なかでも YG 性格検査が多い。コラージュはそれらの心理テスト等の結果や、箱庭等に用いられる空間図式等とコラージュを照らし合わせて解釈することが多い。カウンセリングに長い時間をかけたくない、今すぐどうにかしてほしいというクライアントもいであろう。全てにコラージュを用いるわけではないが、自己表現が苦手、もしくは非言語的なクライアントにはコラージュはとても有効な方法だと思われる。それには少ない時間、回数でクライアントの期待に添える結果を出すことも重要であると思われる。

しかし、現在のコラージュ解釈の根拠は曖昧で、何人かの心理学を学んでいる人間で解釈をしてその一致率で結果、考察としていることが多い。また、判断基準となる空間図式が一つではなく、逆の意味で解釈する図式も存在する。それらの曖昧さがまたコラージュの信頼性に影を落としている可能性もあると考えられる。

今回の研究ではコラージュシートの素材内容を統制することで今まであまり見られなかった基礎的研究を行い、コラージュ作品の素材内容と質問紙の特性と空間図式を照らし合わせることで数量的および客観的に解釈することで事例研究等とは違った空間図式に照らし合わせた基礎的解釈を考え表現特徴を調べる。また、質問紙により主要 5 因子性格検査と、コラージュとの関係を検討した。

性格特性とコラージュ表現の関係を検討するには性格診断検査を用いて、測定される性格特性がコラージュ表現とどのような関係があるか検討するのが一般的である。素材内容を統制し被験者に同一の刺激を与えることで表現特徴とコラージュ解釈法の根拠の信頼性を高める調査になると思われる。調査内容が広いため表現特徴も把握しやすいと思われる。

「方法」

1. 調査対象

調査対象は、女子大学生 86 名とし、うち無記入・欠損にあたる 15 名を除いた 71 名を分析対象者とした。

2. 実施日

2006 年 6 月 8 日・13 日、大学の授業内で配布し、その授業内で回収した。

3. 調査方法

- ①性格検査として、学芸図書出版の 70 項目の 2 件法からなる「主要 5 因子性格検査」(村上・村上、1999) を実施する。
- ②コラージュシートは八つ切り、白の画用紙を使用した。
- ③4 種類の内容を持つ素材を使用した。(a) 人間：ファッション雑誌からランダムに選んだ 7 ポーズの大人の男女と子どもの男女。(b) 動物：ハムスター、イヌ、ネコ、アザラシ、シマウマ、サル、ウサギ、ゾウ、ライオンのオス・メスの計 10 種類。(c) 植物：アサガオ、ペテュニア、ワスレナグサ、観葉植物を中心にした庭、計 9 種類。(d) 建物：住宅街、寺、家、ビル、マンション、玄関等計 12 種類。これらはいずれも任意に選択し B4 版の要旨にカラーコピーにしてある。

4. 手続き

大学の講義時間を利用し、はじめに主要 5 因子性格検査を実施した。次に個人個人に八つ切り画用紙と 4 種類の素材シート、のり、はさみを配布し、一斉にコラージュの作成を求めた。作成終了後、2 枚をホチキスで止めて回収した。性格検査実施時間は約 10 分、コラージュ作成時間は約 30 分程度である。

「結果と考察」

本研究においてコラージュ作品と主要 5 因子性格検査 (BigFive) の有効回答数は 71 人分得られた。それらをもとにコラージュ作品と主要 5 因子性格検査 (BigFive) についての分析を行った。調査対象が女子大学生であったため、男性との性差の比較は検討できない。

まず、コラージュ作品の内容分析と形式分析の結果について。

71 人分のコラージュ作品の「人間」「動物」「植物」「建物」という各素材内容枚数の記述統計量から、「植物」の平均値が特に高く、「建物」の平均値が「植物」に比べると特に低かった。コラージュ作品の各素材内容枚数の平均値の間に有意差があるかどうかを一元配置分散分析にかけたところ有意差が認められた。それらを、多重比較検定したところ、有意差が認められた。「人間」と「植物」を貼る枚数では「植物」の方が多い。「人間」と「建物」を貼る枚数では「人間」の方が多い。「動物」と「植物」を貼る枚数では「植物」の方が多い。「動物」と「建物」を貼る枚数では「動物」の方が多い。「植物」と「建物」を貼る枚数では「植物」の方が多い。

次に、コラージュを先行研究にならい 4 分割法を用い「右上」「右下」「左上」「左下」に 4 分割し、それらに貼られる 71 人分のコラージュ作品の「右上」「右下」「左上」「左下」という各位置枚数についての記述統計量では、一番平均値が高かったのは「右下」であり、一番平均値が低かったのが「左上」であった。さらに、コラージュ作品の各貼付位置枚数の平均値の間に有意差があるかどうかを一元配置分散分析にかけたところ有意差が認められた。それらを多重比較検定したところ有意差が認められた。「右上」と「左上」に貼る枚数では「右上」に貼る方が多い。「右下」と「左上」に貼る枚数では「右下」に貼る方が多い。記述統計量全体と一元配置分散分析と多重比較検定の結果から、コラージュを制作するにあたって、素材内容では「植物」が多く貼られ、貼付位置では「右下」に多く貼られる傾向があることが認められた。

今回の調査では、合計枚数（切片数）の平均値が 15.76 枚であり、杉浦（1994）の成人群の切片数の平均 18.2 ± 7.3 枚と比べても平均値の範囲内であった。そのことから、コラージュ制作に用いる素材内容は自由に持ち込むなど統制しなくても、素材内容を一様に統制しても切片数の平均値にあまり変わりがないことが考えられる。それならば、コラージュに使用する素材内容については、統制を行った方が比較・検討がしやすいと考える。

主要 5 因子性格検査（Big Five）における「外向性」「協調性」「勤勉性」「情緒安定性」「知性」の各 5 因子と、素材内容の関係については分散分析の結果、有意差が認められた中で「植物」を多く貼るという結果がほとんどであった。特に「外向性」については「植物」よりも多く貼られるコラージュの素材内容は認められなかった。「外向性」（右下）では L 群・植物 < H 群・植物という有意差が認められ、「外向性」（左下）では L 群・植物 < H 群・植物という有意差が認められた。佐野友泰（2001）は、コラージュ作品の「右領域は外向性を象徴する」・「外向性」という枠組みの中に、「積極的な変化への努力」という意味を含める可能性を示唆していることから、主要 5 因子性格検査の「外向性」の結果について検討した。「外向性」（右下）では L 群・植物 < H 群・植物という有意差が認められ、「外向性」（左下）では L 群・植物 < H 群・植物という有意差が認められたことについて言えば、「外向性」（右下）H 群「植物」貼付では、空間図式に照らし合わせると、5 因子性格検査の外向性尺度は社会的に外向的なため、右側に貼付されるのは妥当であると考えられる。また、「右下」貼付については、空間図式の「墮落」等と佐野友泰（2001）の述べている右側貼付の「外向性」の意味する「積極的な変化への努力」等とは逆の結果が認められた。さらに、「外向性」（左下）H 群「植物」貼付では、そもそもの「外向性」は右側というコラージュ解釈からして逆の表現になった。空間図式での解釈についても、左側貼付「内向性」という解釈とは逆の表現になった。主要 5 因子性格検査の「外向性」においては（右下）・（左下）ともに「植物」を「下側」に多く貼るのは、空間図式でいう下側領域は「家族・母性・家庭」という意味合いを持っていると言われている。そこで、「植物」の持つ「女性性」の解釈が関連しているとも考えられる。主要 5 因子性格検査の「外向性」においては、「右下」「左下」に「植物」を多く貼る傾向があると考えられる。

主要 5 因子性格検査の「外向性」以外については、「勤勉性」（右上）で、「勤勉性」L 群動物 > L 群人間・L 群動物 > L 群建物、という結果が認められた。勤勉性尺度得点の低い人が「右上」に「動物」を多く貼ることは、佐野友泰（2001）の述べている「右領域は外向性を象徴する」・「外向性」という枠組みの中に、「積極的な変化への努力」という意味

を含める可能性を示唆しているということから、「勤勉性」L群の尺度解釈と、「右上」空間図式と照らし合わせた解釈を総合すると、「勤勉性」尺度得点の低い人が「右上」に「動物」を多く貼るのは、「変化への努力をしない」もしくは「努力をしない」と解釈できると考えられる。そして、「勤勉性」尺度得点の低い人は「右上」に「動物」を多く貼る傾向があると考えられる。

今回の研究目的は、コラージュ解釈の信頼性と妥当性の基礎的研究を考えることから始まった。主要5因子性格検査と素材を統制したコラージュ作品の制作の結果を踏まえて分析したものである。コラージュの解釈については質問紙の結果とコラージュ作品の切片数等から解釈を試みる先行研究がほとんどであり、最初に空間図式に基づいてコラージュ解釈をしている先行研究はほとんどないといえる。そのため比較する先行研究がほとんどないため、単純な形式分析と内容分析の基礎解釈にとどまった。コラージュの先行研究は増加の傾向にあるか、基礎的研究はまだまだ足りないと考える。杉浦（1994）では、「人間」の出現率がずば抜けて高いことが述べられているが、今回の調査では、「植物」の出現率が高かった。切片数の平均値にあまり違いがないのに、素材内容に違いが出ることにに対してはとても興味深いと考える。それらを総合して考えると、今回の結果から、コラージュの解釈には空間図式のもっと細かい枠組みが必要であると考えられる。そしてもっと多くのコラージュの基礎的研究が必要であることを強く感じた。